

---

# 遊戯王GX 時代を超えた転生者

アマ公

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX 時代を超えた転生者

### 【Nコード】

N6547Z

### 【作者名】

アマ公

### 【あらすじ】

子供を助けて死んでしまった「南 彩人」がいろいろなデッキを使って遊戯王GXの世界を過ごしていく。

シンクロやエクシーズをしますのでにがてなかたは読まないようにしてほしいと思います。  
できれば感想などを書いてもらえると主のやる気ができるので願います。

## 序章（前書き）

初めまして「アマ公」です。

初めて小説を書いたのでわかりずらいところも多々あると思いますが、暖かい目で見守ってもらえると幸いです。

自分のペースでできる限り投稿していきたいと思えます。

## 序章

side???

小説でよくある話かもしれないけど俺は今神様の前にいる。

神様曰く俺は一度車にひかれそうな子供を助けて自分が死んでしまつたらしい。

そこで俺は神様に気に入られたようでも遊戯王GXの世界に転生させてくれるらしい。

俺の名前は「南 彩人」（みなみ さいと）遊戯王が好きな高校生だった。

生前はテレビで遊戯王ZEXALがテレビでやっていたのを覚えている。

side out

「お前は生前に体を張って子供を助けたいいやつじゃったかろのおゝそのまま逝かせてしまうのは惜しいからお前の好きな遊戯王の世界に転生させてあげようと思つたのじゃよ」

つと神様が言つてくださいましたので

「それじゃあよろしくお願いします。」

「それじゃ、転生させるさいになにかオプション的なものをつけてやってもいいのじゃがどうする？」

「なにか希望することはあるかね？」

「それじゃあ、今俺が使っているカードとデッキを持っていきたいのと原作に出てくるキャラクターと同じくらいのディスプレイード

ローをお願いしたいです。」

「それぐらいなら構わんじやろ」

「シンクロモンスターやエクシーズモンスターも持っていくのかね？」

正直、遊戯王GXに出てこないシンクロモンスターやエクシーズモンスターを持っていくのはどうかと思ったが、やっぱりもっていき  
たいな。

「シンクロモンスターやエクシーズモンスターもお願いします。」

「わかったのじゃ、それじゃあカードは随時送ることにしよう。」

これから好きな遊戯王の世界にいけると思うとなんだか楽しみにな  
ってきたな！

楽しいデュエルをたくさんできるといいな！！

「それじゃあ転生させるぞ」

「入学試験当日におくるからのぉ〜新たなよい人生になるように働  
も力をかすからの」

こうして俺の新たな人生が始まりを告げる。

## 序章（後書き）

文章考えるのって難しいですね（泣）

次は入学試験です。

デッキはその時に紹介したいと思います。

## 第一話 入学（前書き）

2話目です。

今回はヒロインになる予定の女の子のデュエルです。

ハッキリ言ってた強いですはい。

クリスティア苦手ですね。

## 第一話 入学

本当に遊戯王GXの世界に転成者してきたんだなあ。

目の前にある海馬ドームを見上げながらそう思った。

「記憶はちゃんと残ってるんだな」

腰にはデッキがひとつついていて、

腕にはデュエルディスクがついていた。

「突っ立ってても仕方ないし中に入るか。」

中に入ってみるとすでに実技試験が始まっていた。

「そういえば俺って受験番号何番だっけ？」

ゴソゴソとポケットの中から受験票を取り出して見てみると。

「受験番号112番 南みなみ彩人さいと」

原作では十代が110番だったはずだから俺の他に原作にはいなかった人がいるってことか。

「てか俺って十代よりバカってことか！」

自分で突っ込んでしまったorz

そんなことを考えて落ち込んでいると…

「くらえ！ スカイスクレーパーシュート！」

「マンマミーヤ！ 私の『古代の機械巨人』が」

やっぱりソリッドビジョンはかっけ〜な？

十代に負けて落ち込んでるクロノス先生が退場して新たな試験官が出てきた。

「次！ 受験番号111番！」

「はい…」

緊張しているのか少しおどおどしながら女の子が出てきた。

デッキをディスクにセットするぐらいには少し落ち着いてきたみたいだ。

「それでは試験を始める」

「『デュエル？』」

「私のターン ドロー！」

先行は試験官からのようだ。

「『シャインエジェル』を守備表示で通常召喚」

守 800

「リバースカードを二枚セット」

「ターンエンド」

「私のターン ドロー」

「手札から『大嵐』を発動します」

「何？」

リバーズカードは激流葬とミラーフォースか  
危なかったな。

「さらに手札から『ヘカテリス』を捨てて効果発動します、デッキから『神の居城ーヴアルハラ』を手札に加えます。」

「そして手札から『トレードイン』を発動します。」

「手札交換カードか」

「手札事故でも起こしているのかな？」

手札交換カードを使って手札事故とか言ってる時点で負けフラグだよな。

俺の予想が正しくて手札に蘇生カードがあつたら女の子の勝ちだな。

「手札から『神の居城ーヴアルハラ』を発動します、そして手札から『墮天使アスモディウス』を特殊召喚、そして効果発動、デッキから『大天使クリスティア』を墓地に送ります。」

「手札から『死者蘇生』を発動します。墓地の『墮天使スペルビア』

を特殊召喚します。

『スペルビア』の効果で墓地の『クリスティア』を特殊召喚します。

」

あーあ、

あの試験官終わったな。

まだいけるみたいなの顔してるけど『クリスティア』の効果知らないのかな？

「バトル！」

「『クリスティア』で『シャインエンジェル』に攻撃します。」

「……………」

名前が思いつかないらしい。

いつの間にか『クリスティア』が『シャインエンジェル』を切り裂いていた。

「くっ やるな！ だが『シャインエンジェル』が戦闘で破壊された時デッキから攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚できる！」

「私はデッキから『クリスティア』がフィールドにいる限りお互いに特殊召喚をする事ができません。」 なんだと？

「残り2体のモンスターでダイレクトアタックします！」

「ぐああ〜?」

L I F E   4 0 0 0   |   1 9 0 0

「ありがとうございました」

小さくお辞儀をして女の子はデュエル上から降りて行った。

後攻ワンターンキルですか。

目立つ事するなあ〜ww

会場がざわついてるよw

「さて、次は俺の番かいつちよ楽しんで来ますか!」

## 第一話 入学（後書き）

始めてデュエルしてるところ書きましたが難しいです（泣）  
技の名前は思い浮かばなかったので今回ははぶきましたw

よくわからないかもしれませんが暖かい目読んでやってください。  
それでは次回彩人がデュエルします。

## 第二話 シンクロ召喚 やっぱりワンキル!?(前書き)

今回は彩人君のデュエルです。

結構悩んだんですけど最初からシンクロしていくことにしました。

それではクロノス先生の悲惨なデュエルをお楽しみください W W

## 第二話 シンクロ召喚 やっぱりワンキル!?

side 彩人

受験番号111番の女の子のデュエルが終わって俺が呼ばれる番がやってきたようだ。

俺の相手は誰なんだろうな？

そつえば腰にひとつデッキついてたけど中身確認してなかったww  
どうしよう、なんのデッキかわかんないや。

まあデュエルが始まってからの楽しみということにしとこうかな。  
俺が前世で使っていたデッキなら正直この場で負ける気はしないからな。

自分のデッキを信じて楽しくデュエルとでもいきますかね。

side out

「次っ！ 受験番号112番!!」

「ほーい」

っと呼ばれたのでデュエル上になってみるとそこにはクロノス先生が立っていた。

やっぱり試験の相手はクロノス先生じゃないとねww

「さっきのドロップアウトボーイにやられたうさはらしをしてやる  
ノーネ。」

「恨むならさっきのドロップアウトボーイを恨むノーネ。」

「すみませんが負けてあげるつもりはないのでよろしく願います。」

「楽しいデュエルにしましょう。」

「ドロップアウトーが何ほざくノーネー!!」

「返り討ちにしてやるノーネー!!」

「デュエル!!」

「私のターンなノーネ ドローニヨ」

どうやら先行はクロノス先生らしい。

「私は『トロイホース』を攻撃表示で召喚なノーネ、そして手札から『デュアルサモン』を発動するノーネ、『トロイホース』を生贄にして最強のモンスター『古代の機械巨人』を攻撃表示で召喚するノーネ。」

A / 3000

さすがはクロノス先生、最初のターンで『古代の機械巨人』を召喚してくるなんてな。

最後のころの改心したクロノス先生は好きなんだけどな。

「リバーズカードを2枚セット、ターンエンドなノーネ。」

クロノス：手札1枚

私のアンティークギアゴーレムを破壊できるとは思わなければど一様念には念を入れとくノーネ。

リバーズカードは『リミッター解除』と『ミラーフォース』なノーネ。

コテンパンにしてやるノーネ。

「俺のターン ドロー！」

おおっ、このデッキは俺が使ってたデッキで安定して強かったデッキじゃんか

しかもこの手札・・・ぶつちゃけワンキルじゃん

「俺は手札から『大嵐』を発動！」

大嵐ってほんと強いよな。あ

一枚でとるアドバンテージじゃないよな。

「ペペロンチーノ!?!」

危ない危ないww

あんな危ないもん伏せてるなんてどんだけ手札いいんだか。

まあ俺も人のこと言えないかw

「『未来融合ーフューチャー・フュージョン』を発動！ 対象は『ファイフ・コック・フット・フット』  
F・D・G』デッキから素材として『ドラグニティアームズ・レヴ  
アティン』2枚と『ドラグニティーフアランクス』2枚、『ドラグ  
ニティーフアキュリス』を墓地に送る。』

会場のみんながざわざわしている。

それもそうかこの時代に『ドラグニティ』はないからな。

「聞いたことがないモンスターなノーネ」

「これから忘れられないようにトラウマにしてあげますよ」

「なにを言っているノーネ、私の場には攻撃力3000のアンティ



「チューナーモンスターってなんなノーネ!? 聞いたことないノ  
ーネペペロンチーノ」

会場のみんなも気になっていようで首をかしげている。

「それについては後で説明してあげますよ。」

「レベル4の『ドウクス』にレベル2の『ファランクス』をチュー  
ニング」

「神の力が槍に宿りて。われの道を切り開かん! シンクロ召喚! 突  
き刺せ『ドラグニティナイトヴァジュランダ』」

A / 1900

「「「「「!?」「」「」」

会場のみんなが啞然としている。

「どうなっているノーネ、そのモンスターはどうやって出ってきた  
ノーネ!? 説明してほしいノーネ!!」

「シンクロ召喚はチューナーモンスターと呼ばれるモンスターとチ  
ューナー以外のモンスターのレベルを足して特殊召喚する方法です」  
「レベル4の『ドウクス』とレベル2のチューナー『ファランクス』  
でシンクロすることでレベル6の『ヴァジュランダ』を特殊召喚し  
たわけです。」

「驚いたノーネ 初めて見たノーネ それでもただの攻撃力1900のモンスターじゃわたしのモンスターは倒せないノーネ。焦らせないほしいノーネ」

「焦らないでほしいですね『ヴァジュランダ』の効果発動、墓地からレベル3以下のドラゴン族・ドラグニティを装備することができます、効果で墓地の『アキュリス』を装備！」

「そして手札から『死者蘇生』を発動！墓地の『レヴァティン』を特殊召喚！」

A / 2600

「『レヴァティン』は特殊召喚されたとき墓地のドラゴン族を装備することができる！もう『フランクス』を装備、そして『フランクス』の効果で特殊召喚！」

「リバースカードを2枚伏せレベル8の『レヴァティン』にレベル2の『フランクス』をチューニング」

「3つの首を持つ龍よ。その巨大な力で敵をねじ伏せる！シンクロ召喚！喰らい尽くせ！『トライデント・ドラギオン』」

A / 3000

「『ドラギオン』は召喚に成功した時自分フィールド上のカードを破壊することでその枚数分攻撃することができる！リバースカードを2枚破壊して3回分の攻撃の権利をえる！」

「3回攻撃ができたとしてもアンティークギアゴーレムと同じ攻撃力じゃどうしようもないノーネ」

正直焦ったノーネ

「『ヴァジュランダ』の効果は装備するだけじゃないんですよ先生」  
「なんですーのペペロンチーノパルメザンチーズ!？」

「『ヴァジュランダ』の効果発動!装備カードを一枚墓地に送るところで攻撃力を倍にする!」

A / 1900 3800

「攻撃力3800とかありえないノーネ アンティークギアゴーレムが戦闘で負けてしまうノーネ」

「そして墓地に送られた『アキュリスの』効果発動!装備状態のこのカードが墓地に送られたときフィールド上のカードを1枚破壊する!先生の『古代の機械巨人』を破壊します」

「戦闘じゃなくて効果で破壊されてしまったノーネ!？」

「これじゃ場ががら空きなノーネ!！」

「バトル!！」

「『ヴァジュランダ』で先生にダイレクトアタック」

「雷牙槍!」

雷をまとった槍で先生を突き刺した。

LP 4000 200

「ドラギオン』でダイレクトアタック」

「破滅のトライデントストリーム」3連打ああああ!！」

5連打カイザー的なノリで言ってみたけど案外楽しいかもしれないww

「なんでこうなルーノ ペペロンチーノ!?!?」

LP200 18800

「楽しいデュエルでしたよ先生、またやりましょうね トラウマに  
ならないといいですねww」

第二話 シンクロ召喚 やっぱりワンキル!?(後書き)

長い文になってすいませんでした。

最初はやっぱりワンキルでしめないとだめですよねww

彩人の最初のデッキは『ドラグニティ』でした。

普通に強いですよww

ペペロンチーノ個人的に好きですよww

次はたぶん短めの分になると思われます。

デュエルが終わった後を書いていきたいと思っています。

**第三話 フラグ立てちゃった？（前書き）**

今回はデュエルなしです。

彩人君はなんかフラグ立てちゃってます。

### 第三話 フラグ立てちゃった？

「楽しいデュエルでしたよ先生、またやりましょうね トラウマにならないういすねww」

side???

私は彼のデュエルを見てとてもかっこいいと思い彼に興味をもった。

シンクロ召喚という未知の召喚方法を使ってあの変な先生をワンターンキルしてしまった。

正直とてもかっこよかった。

なんだろうさつきから彼のことが気になってる。

こんな思いになったのは初めて...

sideout

side彩人

「派手にやちゃたけどだいじょうぶだよな。」

そんなことを考えていると向こうから十代達<sup>覇王</sup>がやってきた。

「すげーデュエルだったな！！あんなの初めて見たぜ！ 俺、遊戯十代。気軽に十代でいいぜ。」

「なんかすごい目立ってたすよ、けどかっこよかったす。僕、丸藤 翔。翔でいいすよ。」

「君のデュエルには興味があるこれからそれを調べてみたい。俺は

三沢 大地だ。よろしく」

いきなり原作キャラとコンタクトとっちゃたよw  
これも神様の加護ってやつかな？

「三人ともこれからよろしくな。俺は南 彩人だ。彩人って呼んでくれ。」

「それより俺とデュエルしてくれよ！彩人のかっこいいモンスターをみたいぜ！！」

なにいつてんだかこの霸王は、さすがに目立ちすぎた。今日はもうあんまり目立ちたくないんだよな。

「わるいな十代、また今度な。」

「ええ〜、デュエルしようぜ〜。」

十代にせがまれて困っていると。あのワンキルしてた女の子をみつけた。

「ちよつと用事ができた、じゃあまた今度な。」

「十代、入学したらデュエルしようぜ。」

「わかった、絶対だからな！」

「また今度っす。」

あれ？だれか忘れてる気がするけどまあいつか。  
あの子に話しかけてみよ。

「おおーい」

side out

side???

「おおーい」

「きゃっ!?!」

突然さっきまで考えていた彼から声をかけられて驚いてしまった。

「わるい、驚かせちゃったな。」

近くで見ると案外かっこいいかも。

「どうした？俺の顔になにかついてんのか？」

どうやらじっと見てしまったらしい。

「何でもないです．．．どうしたんですか？」

side out

side 彩人

声をかけたら驚かれてしまった。

「わるい、驚かせちゃったな。」

なぜか俺の顔をじっと見ている。案外かわいいかもしれない。

「どうした？俺の顔になにかついてんのか？」

「何でもないです・・・どうしたんですか？」

「さっきあの先生相手にワンキルしてただろ？つよいんだな〜って思ってたな。」

「それと後ろにいる小さな大天使も気になっただ。」

俺もさっき十代の時に気づいたんだが精霊が見えるようになったらしい。

正直おどろいた、後で十代にも教えておこう。この子が気になっただ言いそびれちゃったからな。

「この子が見えるんですか？」

「ああ、さっきのデュエルで活躍してた『大天使クリステイア』だろ。」

そう彼女の背中にはデフォルメされた『クリステイア』がいる。

「自己紹介がまだだったな、俺は、南 彩人だ。 彩人って呼んでくれ。」

「私は須藤<sup>すどう</sup> アキっていいいます。下の名前で呼ぶのは少し恥ずかしいです。」

「わかったアキな。できれば慣れてるから下の名前の方がいいんだ

が、まあ恥ずかしいならしかたないか。」

「俺には精霊はいないんだが精霊が見える者同士よろしくな。」

「はい、よろしく願います。」

そのあと雑談したり、連絡先などを交換してわかれた。

「しかし、あの子かわいかったな。」

顔をじっと見られたときは少しドキッとしてしまった。

「俺も精霊が見えるとわな。」

「まあ深く考えても仕方ないな。楽しくデュエルできればそれでいいや。」

side out

sideアキ

声をかけられたときはびっくりしてしまった。

近くで見たらかつこよかったからすこしドキドキしてしまった。

「南さんも精霊が見えるとはおもわなかったな。」

「話してて楽しかったな。また会いたいかも。」

**第三話 フラグ立てちゃった？（後書き）**

やっぱり書くのって難しいですね。

アキちゃんの登場です。

後でキャラに関しては紹介したいと思います。

誰か途中から忘れてます。

次はサンダーさんが出てくるかもしれません。

#### 第四話 方向音痴の残念な子（前書き）

今回はデュエルないです。

万丈目さん少ししか名前でないです。

アキと彩人急に仲良くなってます。

今回は面白い感じになっていればいいと思います。

## 第四話 方向音痴の残念な子

side 彩人

入学試験から数日がたって合格通知が来た。

この数日何をしてたかというところ。

この時代のことを調べたり、アキと連絡を取ったりしていた。

この時代の禁止制限は本当にゆるい。

『強欲な壺』や『天使の施し』、極めつけは『苦渋の選択』だろう。墓地確認などがなかったため本当に強いと思う。

俺が使っていたデッキでは、自分のデッキを削っていき最後には墓地から特殊召喚などのギミックを使ったデッキを作っていた。

墓地確認がないためより奇襲がかけやすくなったと思う。

今はカードが数枚と『ドラグニティ』のデッキしか持っていない。

神様が随時送ってくれると言っていたからアカデミアにおいてあるのかもしれない。

まあ、持ち運ぶ手間がなくて済むのだが、正直デッキをいじってみたくてしょうがない。

「アカデミアで楽しいデュエルがいっぱいできればいいな。」  
side out

数時間後船で気持ち悪くなったのは別のはなし。

「やっとついた。」

死ぬかと思った、船にはもう乗りたくないな。

「ワンキル決めたのにオシリスレッドかあ。まあオベリスクブルとかより全然いいんだけどな。」  
船の中で渡された制服は赤色だった。

「さて、そろそろ寮に向かうか。」

このとき彩人は寮の方向とは全く別の方向に進んでいることには気づいていない。

「これは俗にいう迷ったというやつなのか？」  
森の中をさまよっていた。

そこっ！森に入る前に普通気づくだろうとか突っ込まない！！

「どうすっかな、腹減ってきたな。」

入学初日に遭難とか笑い話にしかなんねえよ。

「この学園内で連絡先知ってるのアキぐらいしかいないんだよな。」  
そこっ！友達いないんだよな。とか突っ込まない！！寂しくなるだろうが！！！！

PDAを取り出しアキに電話をかけてみることにした。  
数回呼び出し音が鳴った後アキが出た。

「もしもし？どうしたの？」

どうでもいい話だが、この数日でアキとは仲良くなった。

「森で迷ってしまった。」

「…ぷっ 天使さんを迎にいかせるねw」

「どうでもいいことなだけどさ、今笑ったよね!？」

しかもこの状況で天使迎にいかせるってしゃれにならないからね？」

「じゃあずっとそこにいれば？」

「…ごめんなさい。」

そんな話をしていると、『クリスティア』が迎えに来てくれていた。すでに迎を出してくれていたなんていいやつや…

「今『クリスティア』が迎えに来てくれたよ。」

「ありがとうな」

「どづいたしまして。」

「じゃあ、また今度な。」

PDAをしまつて、『クリスティア』についていくとぼろぼろの寮についた。

寮につくと、『クリスティア』はかえっていった。

「やっぱりぼろいな。」

自分の部屋を見つけて中に入ってみると。

「すごい量のダンボールだな」

部屋には大量のダンボールがあり大量のカードが入っていた。デッキはひとまとめになっており、カードもきちんと整頓されていた。

「さて、歓迎会までの間にデッキでもいじるかな。」

確認していくと、宝玉獣をはじめとしたこの時代の特定の人物しか持っていないカードも3枚ずつ入っていた。さすがにそれには驚いた。

「まあ、さすがにこの辺は使えないよな。」

しばらくいじっていると歓迎会の時間になっていた。

歓迎会はそれなりに楽しかった。

そして今、十代達の部屋にいる。

「なるほど、万丈目とかいうやつに目をつけられたわけだ。」

「なら、お前らのデッキを少し強化するか。もちろんお前らが望むならだが?」

「そんなことしてもらっていいのか」

「ああ、幸いカードは俺の部屋にたくさんあるからな。」

「面白そうだから俺はお願いするぜ!」

「僕もお願いするっす!」

二人のデッキをいじりつつ二人の個性を生かすために三人で散々悩んでデッキが完成して  
PDAがタイミングよくなった。

「どうやら十代を呼び出したみたいだな。」

「どうする十代？いくのか？」

「当たり前だろ！デュエルがしたくてウズウズしてるんだからな！」

「それなら俺もついていくとしよう。」

「サンキューな。」

「なら僕もついていくす。」

そして三人してデュエル場へと向かった。

#### 第四話 方向音痴の残念な子（後書き）

十代と翔のデッキ強化しました。

ちなみに今の段階ではシンクロは詰まらせていません。  
純粹にHEROビートです。

次回はちゃんとデュエルがあります。

## 第五話 VS万丈目(前書き)

はっきりいって悲惨なデュエルです。  
万丈目さんかわいそうです。

## 第五話 VS万丈目

「よく来たな！ドロップアウト！！逃げずに来たことを誉めてやるう。」

うわあ〜いきなり小物っぽいこと言っちゃってるよ。恥ずかしくないのかな？

「つきさまああああ〜〜〜」

おろお？もしかして口に出しちゃってた？俺としたことがやってしまったな。

「わるい。思ったことがつい口に出てしまった。」

「もう我慢できん！そっちのドロップアウトから叩き潰してやろうと思ったが計画変更だ！！お前から叩き潰してやる！！！！」

「いいけど、俺はわざと負けてやるほど優しくないぞ？」

「よくもここまで俺をこけにしてくれたな！」

「アンティールだ！お前が負けたらシンクロモンスターとやらを俺によこせ！！」

シンクロモンスターだっけあってもどうするんだか。こいつやっぱりばかだろ。

「俺が勝ったら何をくれるだ？」

「ふんっ、そんなことは絶対はないが、もし本当に負けたら何でも好きなカードをやるっ。」

「その言葉忘れるなよ。」

「なんか俺らおいてかれてるな。」

「そうっすね。」

ぼやいている二人がいたそうっす。

「デュエル!!!」

「俺のターン ドロー」

俺の先行。

原作では、ガードマンが来て途中で終わるんだっつたな。早々に決着をつけないと。

正直カードはいらなないがこいつのプライドはへし折ってやりたい。

「このデュエル早くおわせそうだな。」

「なんだとキサマ！嘘をついてないでさっさとターンをすすめる！」

「言われなくてもそうっすさ。」

「俺はモンスターを1枚伏せ手札から『ガーディアン・エアトス』を特殊召喚。」

「レベル8のモンスターを生贄なしで特殊召喚だと!？」

「彩人君、あんなすごいカード持ってたんすね。」

「かつこいいいゝゝゝ俺も彩人とデュエルしてえゝゝゝゝゝ!」

「『ガーディアン・エアトス』は墓地にモンスターがない時、特殊召喚することができる。」

「リバーズカードを4枚伏せてターンエンド。」

彩人：手札 0

モンスター 2

リバーズ 4

「俺のターン ドロー!」

「俺は『リボーン・ゾンビ』を守備表示で召喚!」

D / 1600

「さらにリバーズカードを1枚セット ターンエンド。」

どうでもいいからこの辺の原作は覚えていないが。

「エンドフェイズに、『サイクロン』リバーズカードを破壊する！」

「なんだと！俺のカードが!?!」

『ヘル・ポリマー』か、わりとどうでもいいが。

万丈目：手札 4

モンスター1

リバーズ0

「俺のターン ドロー。」

「スタンバイフェイズにリバーズカード発動。『チェーン・マテリアル』、このカードを発動したターンのエンドフェイズまで融合素材を、デッキ・手札・フィールド・墓地から除外することで素材とすることができる。」

まあ、攻撃宣言できないことや、エンドフェイズにフェイズに破壊されるデメリットがあるがこのデッキでは関係ない。

「伏せていた『メタモルポット』を反転召喚。」

「効果でお互いに手札をすべて捨て5枚ドロウする。俺は1枚カードをすてる。」

「ちっ俺は4枚だ。小賢しい真似を。」

「手札からフィールド魔法『フュージョン・ゲート』を発動。お互いに融合する場合融合素材を除外することで融合をおこなえる。」

「『チェイン・マテリアル』の効果発動。デッキから『E・HEROオーシャン』と『E・HEROフォレストマン』を除外して融合召喚。」

「希望を力に変える最強のHERO!いでよ。絶対零度のHERO『E・HEROアブソルトzero』」

A / 2500

「アニキと一緒にのE・HEROっす!」

「俺にくれたカードの中にも入っていたけど。彩人もHEROを使っただな!」

「『アブソルト』をリリースして、手札から『カタパルト・タートル』を準備表示で召喚。」

D / 2000

「この瞬間『アブソルト』の効果発動!このカードがフィールドを離れたとき、相手のモンスターをすべて破壊する!」

「なんだと!?!フィールドを離れるだけで効果が発動するモンスターだと!?!」

「どつやらのターンで終わりのようだな。」

「そんなはったりは俺にはきかん！」

「まだライフは4000ものっこっているんだ」

「4000しかの間違いだろ？」

「さらに『チェーン・マテリアル』の効果発動。今度は、デッキから『E・HEROバブルマン』・『E・HEROフェザーマン』・『E・HEROバーストレディー』・『E・HEROクレイマン』を除外して融合。」

「すべてを優しく包み込む光を放て！『E・HEROエリクシーラ』」

A / 2900

「召喚に成功した時除外されているカードをすべてデッキに戻す。」

「さらに『カタパルト・タートル』の効果発動。」

「『エリクシーラ』をリリースして、攻撃力の半分のダメージを与える。」

LP 4000 2550

「もうわかったよな万丈目？」

「こんなことはありえない！俺が何もできずに負けるなんて！」

「もう一度『アブソルート』を召喚し、『タートル』の効果発動」

LP 2550 1300

「『エリクシーラー』を召喚し、『タートル』の効果でリリース。」

LP1300 1150

「俺がなにもできずに負けるだと。」  
万丈目が膝をがっくりついて悔しがっていた。

「楽しいデュエルだったぜ万丈目。次はちゃんと戦えるようにしろよ。」  
「はいそこっ！えげつないデッキ使ってるくせによく言うつよって目でみない！」

いつの間にか明日香も来ていた。

「あなたってひどい人なのね。」  
「なんか俺の評価下がった。」

「やばいは、ガードマンが来たは！」

それから各自解散して寮に戻っていった。

「南 彩人。面白いひとね。」

明日香の評価が上がったようだ。

## 第五話 VS万丈目（後書き）

『チェーン・マテリアル』と『フュージョン・ゲート』の愛称は抜群です。

純粋なビートにも使えます。

『エアトス』出した意味がない。

墓地の調整が可能なので入ってます。

遊戯王のアニメではそうは出てこないバーンデッキにしてみました。

このコンボを止めるのは結構大変です。

なにげ今まで書いてるデュエルワンキルなんですよね。

次くらいからはちゃんとした対戦にするつもりです。

## 第六話 人物紹介と設定（前書き）

今回は人物紹介とデッキの説明をしていききたいと思います。

## 第六話 人物紹介と設定

『南 彩人』身長178cm

体重68kg

見た目は想像では、エア・ギアに出てくる南みなみ 樹いつきを大きく成長させた感じです。

しっかり者ではあるが、天然が入っていてボケたりしています。

最近アキのことが気になり始めているこの物語の主人公。

いろいろなデッキを使うことができるタクティクスを持ち合わせていて神様にももらったドロアの運もあり普通に対戦しているとワンサイドゲームになることもしばしば。

友達や大切な人を傷つけられると我慢できない性格。後先考えずにつっぱしってしまいがち。

今までに使用したデッキ：「ドラグニティ」（忍者の登場などでいろいろな派生がある安定感があるデッキ。『竜の渓谷』を引けば毎ターンシンクロにつなげることができる。

ただし、長期戦になってしまうとサーチしてくるモンスターが尽きてしまうので、早々に決めるか、『ガルドスの羽根ペン』や『貪欲な壺』などが必要になる時がある。使う前に終わることがほとんど。）

「マテリアルHERO」（バーンやビートもできるなかなか面白いデッキ。必須カードは『フュージョン・ゲート』、『チェイン・マテリアル』、『エリクシーラー』を融合するための素材。あとは『サイクロン』や『大嵐』を対処できるようにすればワンターンキルも可能。）

これからもいろいろなデッキを使用する予定です。

儀式に特化させたデッキなども使います。

「須藤 アキ」身長160cm

体重50kg

スリーサイズ??? (教えてくれませんでした。)  
見た目は想像では、エア・ギアに出てくる野山野<sup>のやまの</sup>林檎<sup>りんご</sup>を幼くした感じ。

出るところ出て、ルタイル抜群です。

性格は、おとなしく恥ずかしがり屋で人見知り。彩人には心を開いている。彩人相手だと違った一面を見せる。案外Sだったりするのかもしれない？

今までに使用したデッキ：「終世」(「ヴァルハラ」や「死皇帝の陵墓」などから高攻撃力のモンスターが出てきて場を制圧。「クリステイア」 「光と闇の竜」などで相手の反撃を許さない。) 某カードショップのデッキを使わせてもらってます。

一様このデッキを主にやっていく予定です。

ご要望があれば感想などを書いていただければ考えていきたいと思っています。

人物紹介はこんなところにしたと思います。

彩「こんなくだらない小説だが、読んでくれるとうれしい。」

ア「よろしくお願いします」「ペコッ

彩「かわいいな」

ア「…//」

ラブコメになってきた二人は置いて次回はラブレター事件を書く予定です。

まだ彩人とアキはお互いの気持ちに気づいていないという設定になっていますので、その辺をご理解お願いいたします。

## 第六話 人物紹介と設定（後書き）

感想を書いてもらえるとうれしいです。

第七話 伏線？ 本当に怖いのは？（前書き）

今回はデュエルないです。

今主は運が尽きていて最悪です。

自転車に追突されたり。

失恋したり。

いくつか買い物したら一つ袋に入れられてもらえず、寒い中もう一度取りに戻ったり。

そんなんで投稿したのでグダグダです。

第七話 伏線？ 本当に怖いのは？

「やべえやっぱリアキは強い。俺がこんなに追い詰められるなんて。」

「うぬぼれじゃないがこの世界に来てから、もともとあったタクティクスに加えて神様からもらったドロー運がある。なのに追い詰められている。」

「このドローで決まるんだな。」

俺は目を閉じて自分のデッキを信じ静かに引き抜いた。

「彩人お~~~~~翔がさらわれた!!」

「いきなり入ってきてそれじゃよくわからない。ちゃんと説明しろ。」

「まあ、原作を覚えているから十中八九偽のラブレターでクロノスに騙されて風呂を覗いたという事で捕まったんだろ。」

「さつきメールで、『マルフジシヨウハアズカッテイル。カエシテホシクバ、ジヨシリヨウニコラレシ。』ってきたんだよ!」

「そうか、そういうばさつきアキからもメールが来ていたな。」

「それはいつものラブラブのメールだろ？」

「いいから聞けバカ。『ええーと、もし大丈夫だったら女子寮のところまで来てくれないかな？』」

「やっぱりラブラブだな！」

「ラブラブでもないし、いつもメールか電話だ。そうそう呼び出されることなんてないだろ？さっきのメールに関係してるのは丸わかりだろ。」

「そうか。俺は行くけど彩人はどうする？」

「俺も行く。」

もし本当に翔が風呂を覗いてアキが見られたとしたら…翔の命は今日までだな。

二人して女子寮へと向かった。

なぜわざわざボートを漕いで湖の上で話をしなければいけないんだ？ボートの上には手足を縛られてとらえられている翔と、明日香・ももえ・じゅんこ、そしてなぜかアキがいた。もしかして本当に翔は覗いたのか？

「んっでなんで翔は捕まってるんだ？」

「こいつがお風呂を覗いたのよ。」

「アニキ〜彩人君助けて〜うるせえ黙れ。」ええ？」

「アキお前も覗かれたのか？」

「わかんないけど…一緒に入ってたからもしかしたら…」

「俺はそっち側について翔を殺すでしょう。」

「ちょっとまってほしいっす！！僕は覗いてないっす！！」

「…ほんとうだな？」

「すこし黒いオーラと殺気をだしながら聞いた。」

「ひっ！？絶対っす！！神様にちかっす！！」

「わかった。それならいい。」

笑顔で答えてやる。

この場にいた誰もが彩人を敵に回してはいけなさと感じた瞬間だった。

「っでどうしたら翔を返してくれるんだ？」

一番最初に立ち直った十代が訪ねた。

「デュエルをして勝ったら返してあげるは。」

「わかった。どういつ風ににデュエルするんだ？」

「私と十代。アキと南君でどうかしら？」

「どうでもいいんだが南君っていうのはやめてくれないか？彩人でいい。」

「わかったわ。だけどあんまりそんな事言ってる私の隣の子に殺されないといいわね。」

明日香の隣でアキが変なオーラを出してこっちを見ていた。

「ええ〜とごめんなさい…。」

「彩人君その口閉じようか？」

「以後気を付けさせていただきます。」

「「「「「さつきまでの彩人の面影ねえ〜〜〜〜！！」「」「」「」

「そろそろデュエル始めましょうか？」

「わかった。」

「どんなデュエルができるかわくわくしてきたぜ！」

「彩人君よろしくね。」

先に十代と明日香がデュエルを始めるようだ。

一緒にやらないのかって？

お互いにデュエルが見たいんだから仕方ないじゃん。

「デュエル！！」

第七話 伏線？ 本当に怖いのは？（後書き）

最初の文はアキと彩人のデュエルの伏線です。

裏スリ作ったりデツキ作ってたら更新遅れてしまいました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6547z/>

---

遊戯王GX 時代を超えた転生者

2011年12月29日03時49分発行